

北野 浩章

1. はじめに

従来、逆接の接続詞については、日本語や英語を対象に多くの研究がなされてきている。逆接という接続関係自体が興味深い研究対象であるが、一方、同じ逆接を表わすとされる複数の接続詞の間の比較研究は少ないようである。本稿では日本語の接続詞のうち、「しかし」と「ところが」を取り上げ、両者の分布を比較し、機能上の差異を記述・考察する。以下で詳しく見るように、「しかし」と違って「ところが」には使用上の制限が存在し、「しかし」が使える場合でも「ところが」が使えないことがある。この「ところが」の使用条件を明らかにすることが、本稿の目的である。なお、考察対象を「しかし」または「ところが」によって結合された2文、すなわち、前件をp、後件をqで表わせば、「p.しかしq」「p.ところがq」に限定する。従って、「pだけど、しかしq」「pだが、ところがq」というような例文は対象外とする（以下、簡略のため、「p.しかしq」「p.ところがq」は、「pしかしq」「pところがq」と表記する）。

2. 「ところが」の使用条件

「ところが」の使用条件を規定するのは、本稿で「話者関与性」と呼ぶ概念である。最初にこの概念を用いて、「ところが」の使用条件を述べておく。

「pところがq」において、後件qに対する話者関与性が高ければ高いほど不適格である。

つまり、「pところがq」が適格であるためには、話者関与性の低いqでなければならない。そして、そのことを示す統語的・意味的特徴を、qが備えてなければならないのである。

話者関与性とは、話者が命題を構成するための情報をどのようにして手に入れたかということに関する概念である。例えば、話者が全く主観的に命題を構成したとすれば、話者関与性は高く、逆に、話者が自分以外の、何らかの情報源から情報を入手して命題を構成したとすれば、話者関与性は低い、ということになる。別の言い方をすれば、命題に含まれる情報に対する責任を、話者がどの程度負っているかを示すものである、とも言える。

ただし、ここで現実の話者の情報入手方法が問題とされているのではない。あくまでも、文の統語的・意味的特徴から読み取れる情報入手方法が、話者関与性を決定するのである。例えば、話者がある命題pを真であると判断したことを述べるの

に、その判断が全く話者自身の独断的なものであっても、

(1) p なのである。

と述べることは可能である。また、確実な証拠を持っていて、p が客観的な事実であると信じていても、

(2) p であると思う。

と、控えめに言うこともできる。この場合、現実がどうであろうと、(1)より(2)の方が話者関与性は高いと考える。話者関与性を決定するのは、文の統語的・意味的特徴であって、現実の情報入手方法ではないということを強調しておきたい。

話者関与性と密接に関わるのはモダリティである。以下、3. で主に命令文や疑問文など、平叙文以外の文タイプのモダリティを、次に4. では文末のモダリティ形式を扱う。

3. 働き掛け・問い掛け・表出のモダリティ

まず、仁田(1989)で提案されている発話・伝達のモダリティのうちの三種、すなわち、働き掛け（命令、禁止、誘い掛けなど）・問い掛け・表出（意志、希望など）を取り上げて、「p ところが q」において、このようなモダリティを持つ q は不適格であることを指摘しておく。まずは働き掛けの例である。

(3)もう手遅れかも知れない。{しかし／*ところが} 出来るだけの努力はしなさい。〈命令〉

(4)あなたのお気持ちは嬉しいです。{しかし／*ところが} もうこれ以上私を悩ませないでください。〈禁止〉

(5)確かに最初は皆さん躊躇なさいます。{しかし／*ところが} 思い切って参加なさいませんか。〈誘い掛け〉

次に問い掛けの例である。

(6)あなたのやり方は間違っていない。{しかし／*ところが} それで人々が納得するでしょうか。

(7)頼まれた以上、何でもやります。{しかし／*ところが} 本当にこんなことしなければならいんですか。

最後に表出の例である。

(8)決して楽な戦いではない。{しかし／*ところが} 決してあきらめないつもりだ。〈意志〉

(9)明日は遠足だ。{しかし／*ところが} 私は家にいたい。〈希望〉

以上の例では、「しかし」がいずれも適格であるのに対し、「ところが」は不適格である。これらのモダリティは、話者が聴者に何らかの事態が実現するよう要求するもの（働き掛け）であつたり、話者が聴者に情報を要求するもの（問い掛け）で

あったり、話者の意志や希望といったことを表明するもの（表出）である。つまり命題 q は話者自身から発したものであり、外部の世界から情報を入手した、というわけではない。このような場合、 q に対する話者関与性が高いと言えるのである。

4. 文末のモダリティ形式

命題と話者関与性に関して、次に問題にしたいのは文末のモダリティ形式である。最初に仁田(1989)の判断のモダリティ、森山(1989)の認識的ムードの形式を参考に、話者の判断に関わるモダリティを概観する。まず、仁田(1989)において、判断のモダリティは次のように分類されている(41-46)。右は代表的な形式である。

話者の把握・推し量り作用を表すもの : ϕ (=断定)、ダロウ、マイ
推し量りの確からしさを表すもの : ニチガイナイ、カモシレナイ
徴候の存在の元での推し量りを表すもの : ラシイ、ソウダ、ヨウダ、ミタイダ
推論の様態に関わるもの : ハズダ

また森山(1989)では、認識的ムードは次のように分類されている(73)。

ダロウ : ダロウ・マイ
狭義蓋然性認識 狭義判断 : カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ
状況把握 : ヨウダ、ミタイダ、ラシイ
情報把握 : ソウダ、ラシイ

ここで狭義判断とは話者の純粋な判断であり、状況把握とは何らかの状況を根拠として、そこから話者が判断を下すものであり、情報把握とは話者がよそから情報を得て、判断を下すもの（伝聞）である。ダロウが別扱いされているが、本稿では話者の推量を表わすダロウのみを考えている。また、ラシイには二種類あるので、ここではそれぞれ状況把握のラシイ、情報把握のラシイと呼ぶことにする。さて、本稿の話者関与性という用語を用いれば、狭義蓋然性認識の三類のうち、狭義判断が最も話者関与性が高く、情報把握が最も話者関与性が低い、と言えよう。もちろん、どれも話者の判断には違いないが、判断のもととなった情報をどのように手に入れたのかという点で、話者関与性の程度が異なるのである。以下、これら文末モダリティ形式を順に検討する。

4.1. [ϕ 、ダロウ、マイ]

ϕ は話者の断定を、ダロウは推量を表わし、マイはその否定形である。 ϕ 形式の断定における話者関与性についてはまだわからないことが多い。ここではダロウ、マイと比較する目的で、「ところが」を用いても適格な断定の例を挙げておく。

(10)a. 品質はあまりよくない。{しかし／ところが} 値段は安い。

b. 品質はあまりよくない。{しかし／*ところが} 値段は安いだろう。

(11)a. 香港は遠い。{しかし／ところが} 飛行機だと数時間で着く。

b. 香港は遠い。{しかし／*ところが} 飛行機だと数時間で着くだろう。

(12)a. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／ところが} 私には聴かせてくれない。

b. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／*ところが} 私には聴かせてくれないだろう。

c. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／*ところが} 私には聴かせてくれ(る)まい。

推量のダロウ、マイは、話者が情報をどのようにして手に入れたかを明示しない形式である。つまり、話者の判断である、ということのみが前面に出ているわけで、それゆえ話者関与性が高くなり、「ところが」では不適格になるのである。

4.2. 狭義判断 [カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ]

(13)a. 品質はあまりよくない。{しかし／*ところが} 値段は安いかも知れない。

b. 品質はあまりよくない。{しかし／*ところが} 値段は安いに違いない。

c. 品質はあまりよくない。{しかし／*ところが} 値段は安いはずだ。

(14)a. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／*ところが} 私には聴かせてくれないかも知れない。

b. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／*ところが} 私には聴かせてくれないに違いない。

c. 彼は貴重なレコードをたくさん持っている。{しかし／*ところが} 私には聴かせてくれるはずがない。

(15)a. 数年前までは何もない所だった。{しかし／*ところが} 今はリゾート地になっているかも知れない。

b. 数年前までは何もない所だった。{しかし／*ところが} 今はリゾート地になっているに違いない。

c. 数年前までは何もない所だった。{しかし／*ところが} 今はリゾート地になっているはずだ。

4.1. のダロウ、マイと同様、狭義判断の三つのモダリティ形式も話者関与性が高い。話者の確信の程度に差はあるが、これは話者関与性とは関係がない。

4.3. 状況把握 [ヨウダ、ミタイダ]

(16)a. 品質はあまりよくない。{しかし／?ところが} 値段は安いようだ。

b. 品質はあまりよくない。{しかし／?ところが} 値段は安いみたいだ。

(17)a. 見た目は健康そうだ。{しかし／?ところが} 肝臓が悪いようだ。

b. 見た目は健康そうだ。{しかし／[?]ところが} 肝臓が悪いみたいだ。

この状況把握の二つのモダリティ形式は、「ところが」を用いた場合には若干適格性が落ちるものの、4.1. および4.2. のモダリティ形式ほど悪くはない。ヨウダ、ミタイダは森山(1989)の状況把握を表わすモダリティ形式、つまり、何らかの状況を見て、そこから話者が判断を下すものである。4.1. および4.2. の形式と、ヨウダ、ミタイダの違いは、前者が話者が情報をどのようにして手に入れたかということを明示しない形式であるのに対し、後者は情報の出所が、「何らかの状況」であることを明示している形式だということである。従って、情報の出所を明示せずに話者が主観的に判断を下すより、明示して自身の判断の根拠を明らかにする方が、話者関与性は低いと言える。ヨウダ、ミタイダを用いた「ところが」の例が少々不自然ではあっても、4.1. および4.2. の形式より容認されるのはそのためである。なお、状況把握のラシイは4.5. で考察する。

4.4. 情報把握 [ソウダ、ラシイ]

(18)a. 品質はあまりよくない。{しかし／ところが} 値段は安いそうだ。

b. 品質はあまりよくない。{しかし／ところが} 値段は安いらしい。

(19)a. 見た目は健康そうだ。{しかし／ところが} 肝臓が悪いそうだ。

b. 見た目は健康そうだ。{しかし／ところが} 肝臓が悪いらしい。

情報把握のモダリティ形式ソウダ、ラシイは、話者がよそから情報を得て、判断を下すもの、いわゆる伝聞である。よそからの情報である以上、話者が関わる余地は小さく、ゆえに話者関与性は4.1.-4.3. の例よりも低い。(18)(19)が適格であるのはそのためである。

4.5. 状況把握と情報把握

上で見たように、4.3. 状況把握と4.4. 情報把握の差はかなり微妙である。ここではまず、状況把握のヨウダと情報把握のラシイを比較し、次いで状況把握のラシイと情報把握のラシイを比較して、状況把握と情報把握の微妙な差異を観察してみたい。まずヨウダと情報把握のラシイの比較であるが、念のため「しかし」を用いた場合にはヨウダも情報把握のラシイも可能であることを確認しておきたい。

(20) キーウィは見かけは悪い。

しかし、a. (実際に食べてみると) 味はいいようだ。

b. (食べたことのある人によると) 味はいいらしい。

(21) 彼の直球は確かに速い。

しかし、a. (実際にこの目で見てみると) コントロールは悪いようだ。

b. (スポーツ新聞によると) コントロールは悪いらしい。

次に「ところが」の場合を見てみよう。

(22)キーウィの見かけは悪い。

ところが、a. ? (実際に食べてみると) 味はいいようだ。

b. (食べたことのある人によると) 味はいいらしい。

(23)彼の直球は確かに速い。

ところが、a. ? (実際にこの目で見てみると) コントロールは悪いようだ。

b. (スポーツ新聞によると) コントロールは悪いらしい。

相当微妙であるが、(22a)(23a)は(22b)(23b)に比べてわずかに適格性が落ちるようである¹⁾。さらに以下の例も同様である。

(24)私はずっとA社の万年筆を使ってきた。

ところが、a. ? (最近試しに使ってみた) B社の方が品質がいいようだ。

b. (彼の話によると) B社の方が品質がいいらしい。

(25)いろいろと準備に不手際があった。

ところが、a. ? (大勢の客が来てくれたそうだから) 本番はたいへんうまくいったようだ。

b. (話によると) 本番はたいへんうまくいったらしい。

(26)今朝は素晴らしい天気である。

ところが、a. ? (道路が濡れているところを見ると) 昨晚はずいぶん雨が降ったようだ。

b. (家人の話によると) 昨晚はずいぶん雨が降ったらしい。

(27)電話をかけてみたが、でない。

ところが、a. ? (明かりがついているから) 彼女は部屋にいるようだ。

b. (友達の話だと) 彼女は部屋にいるらしい。

(28)昨日は一日中留守にしていた。

ところが、a. ? (灰皿にタバコの吸い殻があるので) 私の留守中に誰かが訪ねてきたようだ。

b. (家人の話によると) 私の留守中に誰かが訪ねてきたらしい。

次に状況把握のラシイと情報把握のラシイを比較する。ヨウダと情報把握のラシイの場合と同じく、差は微妙である。

(29)今朝は素晴らしい天気である。

ところが、a. ? (道路が濡れているところを見ると) 昨晚はずいぶん雨が降ったらしい。

b. (家人の話によると) 昨晚はずいぶん雨が降ったらしい。

(30)電話をかけてみたが、でない。

ところが、a. ? (明かりがついているから) 彼女は部屋にいるらしい。

b. (友達の話だと) 彼女は部屋にいるらしい。

(31) 昨日は一日中留守にしていた。

ところが、a. ? (灰皿にタバコの吸い殻があるので) 私の留守中に誰かが訪ねてきたらしい。

b. (家人の話によると) 私の留守中に誰かが訪ねてきたらしい。

4.6. まとめ

ここまで扱った文末モダリティ形式の、「p ところが q」における適格性の一覧を用例とともに示しておく。

(32) 品質はあまりよくない。

ところが、a. *値段は安い {だろう／かも知れない／に違いない／はずだ}。

b. ?値段は安い {ようだ／みたいだ}。

c. 値段は安い {φ／そうだ／らしい}。

(33) 彼はひどい風邪をひいた。

ところが、a. *もうすっかりよくなった {だろう／かも知れない／に違いない／はずだ}。

b. ?もうすっかりよくなった {ようだ／みたいだ}。

c. もうすっかりよくなった {φ／そうだ／らしい}。

後件 q のモダリティ形式	「p ところが q」の適格性
ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ	*
ヨウダ、ミタイダ、ラシイ	?
ソウダ、ラシイ	○

5. 話者関与性が関わる他の表現

ここまで、話者関与性との関わりにおいて、3. で文のモダリティ、4. で文末モダリティ形式を考察してきた。だがもちろん、話者関与性が関わる表現はそれだけにとどまらない。ここでは、これまで扱わなかった表現が「p ところが q」の q にくる可能性を考え、その場合、話者関与性がどう関わっているのかを考察する。ただ、残念ながら、現在のところまだまだわからないことも多く、網羅的な記述をすることができないため、いくつかのトピックについて述べるにとどめたい。

5.1. 心理・感情などを表わす述語

「p ところが q」の q において、心理・感情などを表わす述語が用いられ、かつその主体が話者である場合、以下のようにおおむね不適格である²⁾。

(34) 彼には欠点もある。{しかし／[?]ところが} 私はそんな彼が好きだ。

(35) 確かに彼は立派な人です。{しかし／*ところが} 時々見せる彼の傲慢な態度には腹立たしさを感じます。

(36) とても手が出ないのはわかっている。{しかし／*ところが} どうしてもそのカメラが欲しい。

(37) すでに地位も名声もあります。{しかし／*ところが} 幾つになっても、飲んで騒ぐのは楽しいです。

(38) 束の間でも、会えるとうれしい。{しかし／*ところが} やはり別れはつらい。

命題の述語が話者自身の心理や感情を表わす場合、その命題の情報は話者自身によって得られたもので、当然、話者関与性は高くなる。しかし、以下のようにこれらの述語に「ものだ」を付加すると、話者だけに当てはまらない一般的な叙述になるため、話者関与性は低くなる。

(39) すでに地位も名声もあります。{しかし／ところが} 幾つになっても、飲んで騒ぐのは楽しいものです。

(40) 束の間でも、会えるとうれしい。{しかし／ところが} やはり別れはつらいものだ。

また、これらの述語を用いていても、過去形になると、たとえ話者自身のことであっても、話者関与性は低くなる。これは、現在の話者の心理や感情に比べ、過去における心理や感情だと、話者も客観的な態度を取りやすいためだと思われる。

(41) とても手が出ないのはわかっていた。{しかし／[?]ところが} どうしてもそのカメラが欲しかった。

(42) 束の間でも、会えるとうれしかった。{しかし／ところが} やはり別れはつらかった。

これらの述語の主体が話者でなければならないことは、次の例から明らかであろう。

(43a) では「暖かい」の主体が話者であるのに対し、(43b) では、「暖かい」の主体は特定されず、客観的に認定できる気候の特徴を述べている。

(43)a. 京都は冬が厳しいと言われる。{しかし／*ところが} 北国育ちの私には十分暖かい。

b. 京都は冬が厳しいと言われる。{しかし／ところが} 今年は十二月になっても暖かい。

5.2. 判断・態度などを表わす述語

次に、話者の判断・態度などを表わす述語が「pところがq」のqに用いられた場合を考えよう。

(44) マスコミにはずいぶん悪く書かれました。{しかし／*ところが} 私は先生を信じています。

(45) 彼とはこのことでずいぶん議論した。{しかし／*ところが} 今となつては彼の方が正しかったと思う。

(46) 腹が立ってしようがなかった。{しかし／*ところが} これもいい経験だったと考え直した。

(47) まだ使えるのにもったいない、と言われました。{しかし／*ところが} どうせすぐに修理が必要になると判断しました。

やはり、心理・感情を表わす述語の場合と同様に不適格であり、理由も、心理・感情の場合と同じであろう。ただ、違う点もあり、判断・態度の述語の場合、過去形でも適格性に変わりがないようである。(46)(47)と、次の例も参照されたい。

(48)a. 先生もずいぶん温和になりました。{しかし／*ところが} 学問に対する厳しさは相変わらずだと思ひます。

b. 先生もずいぶん温和になりました。{しかし／*ところが} 学問に対する厳しさは相変わらずだと思ひました。

5.3. 話者の意志を伴う述語

3. で見たように、「pところがq」で意志や希望を表わす表出のモダリティをもつqは不適格であつた。以下は、表出のモダリティの例ではないが、その語彙の意味に意志性が含まれているような述語の場合である。

(49)a. 試合当日、私は体調が悪かつた。{しかし／*ところが} 無理をして出場した。

b. 試合当日、私は体調が悪かつた。{しかし／ところが} (むりやり) 出場させられた。

(50)a. 言いたいことはたくさんあつた。{しかし／??ところが} 私は黙つていた。

b. 言いたいことはたくさんあつた。{しかし／ところが} 私は(むりやり) 黙らされた。

上の(49a)(50a)では、話者の意志で出場したのであり、黙つていたのである。このように、話者の意志を伴う述語も、話者関与性を高める要因となる。(49b)(50b)を参照すれば、意志性の有無が適格性を決定していることは明らかであろう。また、次の例では、出場したり、黙っているのは話者ではないため、適格である。

(51)試合当日、彼は体調が悪かった。{しかし／ところが}無理をして出場した。

(52)言いたいことはたくさんあった。{しかし／ところが}彼女は黙っていた。

5.4. 話者の個人的情報

ここでは、命題 q が話者自身の個人的な情報を含んでいるような例を考えてみる。

5.1.-5.3. で考察してきた、話者の心理・感情・判断・態度・意志などを表わす述語も、ある意味では話者の個人的な情報を含んでいると言えるが、ここでは、上の分類に当てはまらないような例を少し見ておきたい。

(53)屋根を修理しなければならない。{しかし／*ところが}今は暇がないのでできない。

(54)少しでも発展途上国の役に立つことができればいいと思います。{しかし／*ところが}政治的に特定の立場は取っていません。

(55)UFOから宇宙人が降りるのを見た、という彼の話は信じられない。{しかし／??ところが}UFOを目撃したという証言はあちこちで聞いたことがある。

このように、話者しか知らないような個人的なことも、話者関与性を高める要因となる。それゆえ、上の例は不適格なのである。

5.5. 話者関与性とヴォイス

ある命題の能動文とそれに対応する受動文は、同一の命題内容を表わすとされるが、一方、話者関与性は、能動文と受動文で必ずしも同じではない。

(56)a.世間は彼を疑っているようだ。{しかし／??ところが}私は彼を潔白だと思う。

b.世間は彼を疑っているようだ。{しかし／ところが}私には彼は潔白だと思われる。

(57)a.まだまだ気温は低い。{しかし／??ところが}私は既に春の到来を感じる。

b.まだまだ気温は低い。{しかし／ところが}私には既に春の到来が感じられる。

一人称が「思う」「感じる」の主語にあれば、話者関与性が高いのは上で見た通りだが、対応する受動文にすると話者関与性が低くなる。おそらく、能動文より受動文の方が、命題内容に対し、話者が客観的な態度を取っていることを示唆するからであろう。「思う／思える」や「みる／みえる」といった動詞のペアについても同じことが言える。

(58)a.今や日本は豊かな国だそうです。{しかし／??ところが}私はそうは思いません。

b. 今や日本は豊かな国だそうです。{しかし／ところが}私にはそうは思えません。

(59)a. 一見すると、どこにでも居そうな男だ。{しかし／??ところが}私はこの男はただものではないとみた。

b. 一見すると、どこにでも居そうな男だ。{しかし／ところが}私にはこの男はただものではないとみえた。

5.6. 「語り」の文体

これまで、話者関与性に関わるような様々な述語について検討してきたが、述語の主体が話者、つまり一人称ならば「ところが」が使えなくなる、というような単純な制限ではないことは、5.3.の意志性の考察からも明白であろう。とは言え、主語が一人称なら「pところがq」が不適格になる可能性が高いことは確かである。

だが、逆に主語が一人称でないからといって「ところが」が使えるかと言うと、そうではないということも指摘しておきたい。次の(60b)では主語が三人称であるにもかかわらず、「ところが」は不適格である。ここで話者は「彼」の内面を客観的に報告をしているのではない。むしろ、話者は「彼」と自己を同一化して、第三者である「彼」の内面を、あたかも自分のそれであるかのように描写している。すなわちこれは、やはり主観的な、つまり話者関与性の高い表現なのであり、そのため適格性は低いのだと考えられる。一方(61)では、話者は、太郎、次郎とともに、自分自身のことをも客観的に報告するという態度を取っているようである。一人称主語にもかかわらず、適格なのは、そのためであるように思われる。

(60)a. 私は何度もくじけそうになった。{しかし／??ところが}ここで諦めたら男がすたと思った。

b. 彼は何度もくじけそうになった。{しかし／??ところが}ここで諦めたら男がすたと思った。

(61) 太郎と次郎はすぐにくじけた。{しかし／ところが}私はここで諦めたら男がすたと思った。

(60b)に見られるような文体は「語り」、すなわち小説や物語の地の文に見られるような文体である(cf. 金水(1989))。このような場合の話者関与性の扱いは、また新たな問題を提起するが、本稿ではこれ以上考察する用意はない。

6. 「のだ」

本稿で取り上げてきた例文で、話者関与性が高く、「ところが」が不適格であったものでも、文末に「のだ」を付けるとほぼ適格となるものがあることが観察される。まず、文末モダリティ形式を持つ例文については、次のようである³⁾。

(62)a. 品質はあまりよくない。*ところが値段は安い {かも知れない／に違いない／はずだ}。

b. 品質はあまりよくない。ところが値段は安い {かも知れないのだ／に違いないのだ／はずなのだ}。

(63)a. 見た目は健康そうだ。?ところが肝臓が悪い {ようだ／みたいだ}。

b. 見た目は健康そうだ。ところが肝臓が悪い {ようなのだ／みたいなのだ}。

また、5. で考察してきた例文についても、「のだ」によって適格性が高まるものがある。

(64)a. 彼には欠点もある。??ところが私はそんな彼が好きだ。

b. 彼には欠点もある。ところが私はそんな彼が好きなのだ。

(65)a. 彼とはこのことでずいぶん議論した。*ところが今となっては彼の方が正しかったと思う。

b. 彼とはこのことでずいぶん議論した。ところが今となっては彼の方が正しかったと思うのである。

(66)a. 試合当日、私は体調が悪かった。*ところが無理をして出場した。

b. 試合当日、私は体調が悪かった。ところが無理をして出場したのである。

(67)a. 屋根を修理しなければならない。*ところが今は暇がないのでできない。

b. 屋根を修理しなければならない。ところが今は暇がないのでできないのだ。

(68)a. 今や日本は豊かな国だそうです。??ところが私はそうは思いません。

b. 今や日本は豊かな国だそうです。ところが私はそうは思わないのです。

この現象は、おそらく以下のように説明することができるのではないと思われる。ここで、田野村(1990)の「のだ」の意味と用法に関する議論を援用する。それによると、

「のダ」の基本的な意味・機能は、あることがらの背後の事情を表わす、またはある実情を表わす(5-8)

ということである。さらに、そこから派生される「のだ」の意味特性・使用条件が四点あり、そのうちの一つである「既定性」とは、

「 β のダ」の β は、すでに定まったことがらであることが多い(10)

というものである。この既定性が、上の現象を説明する手がかりとなるとと思われる。ある命題が既に定まった事柄であるということは、その命題がある程度客観的に認められている、ということの意味する。一方、話者関与性の高い表現とは、別の言い方をすれば、客観性に欠ける、主観的な表現である場合が多い。とすれば、そのような表現に「のだ」が結合することで客観性が高くなる、つまり、話者関与性が低くなる、ということになる。従って、「pところがq」において、qの話者関与性が高いため不適格であるものも、「のだ」を付けることで適格となると考えられ

るのである。

7. おわりに

本稿では、「しかし」と「ところが」の分布について、「ところが」が用いられない場合があることを指摘し、その要因を、話者関与性という概念を用いて説明した。すなわち、

「pところがq」において、qの話者関与性が大きければ大きいほど、「ところが」を用いることが不適切になる

ということである。話者関与性については、まだまだ検討すべき余地を残している。「ところが」の使用上の制限として、このような一般化が適切であるのか、あるいはこの他にも条件があるのかなどを、今後考えていきたい。また5. で取り上げてきた用例についても、果たして適切に分類されているかどうか、疑問が残る。これからの課題である。

さて、本稿は「ところが」を中心に議論してきたが、ここで「しかし」についても少し触れておきたい。これまでの用例では「ところが」が不適格な場合でも「しかし」は問題なく用いることができた。それでは、「しかし」がどのような場合に用いることができないかを、次に問う必要がある。例えば次のような、しばしば「話題の転換」と呼ばれる用法もある。

(69) こんにちは。{しかし/*ところが} 毎日暑い日が続きますね。

この例は極端なものかも知れない。だが、「しかし」の用法の多様な拡がりを検討する際には無視できないであろう。ただ、そうすると、そもそも「逆接」とは何か、また、逆接とともに、この種の接続詞の用法の一つとされる「対比」とは何か、といった問題に直面しなければならない。また、順接との比較も考えなければならないだろう。本稿で「しかし」を積極的に取り上げられなかったのは、このように多くの困難があるからで、いずれも今後の研究課題としておく。

補注

1) 次の例のように、はっきりとした差を感じられないものもある。しかし、情報把握のラシイよりもヨウダの方が適切であるような例がない限り、ここでの議論の反例にはならないであろう。

(i) 太郎は花子を愛している。

ところが、a. (あの様子では) 彼女はそれに気づいていないようだ。

b. (まわりの人に聞くと) 彼女はそれに気づいていないらしい。

(ii) 数年前までは何もない所だった。

ところが、a. (地図を見ると) 今はリゾート地になっているようだ。

b. (話によると) 今はリゾート地になっているらしい。

2) 次も心理・感情を表わす述語の例だが、「しかし」と「ところが」で差が感じられない。理由は不明であり、この点はなお検討の余地があろう。

(iii) 子供達にとっては楽しい遊園地である。(しかし／ところが) 私には全く退屈である。

(iv) まだまだ若いつもりです。(しかし／ところが) 階段を駆け上がる時など、年を感じます。

3) 次の表出のモダリティの例では「のだ」が作用しているが、一般に働き掛け・問い掛け・表出のモダリティに「のだ」が効果を及ぼすかどうかは不明である。

(v) a. 明日は遠足だ。*ところが私は家にいたい。

b. 明日は遠足だ。ところが私は家にいたいのだ。

参考文献

金水敏 (1989) 「『報告』についての覚書」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, 121-129. 東京: くろしお出版.

佐竹久仁子 (1986) 「『逆接』の接続詞の意味と用法」 宮地裕編『論集日本語研究(一)現代編』, 162-185. 東京: 明治書院.

田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I - 「のだ」の意味と用法 -』 大阪: 和泉書院.

仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, 1-56. 東京: くろしお出版.

早津恵美子 (1988) 「『らしい』と『ようだ』」 『日本語学』7-4, 46-61.

益岡隆志 (1989) 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, 193-210. 東京: くろしお出版.

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 東京: 角川書店.

森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, 57-120. 東京: くろしお出版.

横林宙世・下村彰子 (1988) 『接続の表現』 東京: 荒竹出版.

(きたの ひろあき、博士後期課程)